

第2講：70「麦かち」

この逸話の収録について

『逸話篇』にある逸話の多くは、昭和6年（1931）に教義及史料集成部の編纂による『おやさまのおもかげ』（上巻）に出ている。この本は上巻のみ刊行されており、昭和44年（1969）に増補されて刊行された。ここには全部で35の逸話があるが、「麦かち」の話は含まれていない。一方、『逸話篇』は、昭和49年（1974）から昭和51年（1976）にかけて4冊本で刊行された。この第1集の中の第19話として、初めて「麦かち」の話が収録されている（4冊本の『逸話篇』は時代順に編集されて1巻に纏められて昭和52年〔1977〕に刊行され、「麦かち」の話は第70話とされた）。とすれば、この逸話は、昭和44年～49年の5年間に、何らかの「原テキスト」を元にして編集・収録されていることが分かる。

逸話の分類法—第1段階

私は、2つの段階で『逸話篇』の分類を試みた。まず、第1段階として、「たすけ（救済）」と「奇跡」との関わりによる分類法がある。それによれば、逸話の内容を次のように4種類に分類することができる。

- (A) たすけに関する逸話
- (B) 奇跡に関する逸話
- (C) たすけと奇跡両方に関する逸話
- (D) とくにたすけや奇跡とは関係ない逸話

「麦かち」の逸話は、とくに誰かをおたすけしたという話ではない。教祖が人とは違うなにか別格な力を示したものと理解すれば、「麦かち」は(B)奇跡に関する逸話だということができる。時期は明治12、13年頃、ここに登場する高井直吉は18歳頃、宮森与三郎は22歳頃で、まさに若者として体力の盛りにあった。そのような若者と一緒に「八十を越えられたとは思えぬ元気で仕事をなさる」教祖の姿に、きっと人々は目を見張っていたことだろう。

逸話の分類法—第2段階

奇跡に関する逸話として有名なのが、「力くらべ」の逸話である。「力くらべ」に関する逸話はいろいろと伝わっているが、『逸話編』ではいずれも教祖が80歳を過ぎてからのものばかりであることに気が付く。全部で9つある「力くらべ」の逸話の内、最初のは明治12年だから教祖82歳、最後のは明治19年なので、じつに教祖89歳の御年になる。またこれらの中で、教祖の教え・論しがついている逸話が7つあり（75「これが天理や」、118「神の方には」、131「神の方には」、152「倍の力」、174「そっちで力をゆるめたら」）、ついていない逸話が2つある。

ここに、第2段階としての逸話の分類法を見出すことができる。それによれば、逸話の内容は次のように2種類に分類される。

- (a) 教祖の教え・論しがついているもの
 - (b) 教祖の教え・論しがついていないもの
- 教祖が何もおっしゃっていない逸話があっても、何の理由も

無しに「力くらべ」をされるはずがないので、おそらく元々は教え・論しがあり、それが何らかの理由で脱落した可能性がある。その教え・論しの内容は、他の「力くらべ」の話と重なるものだったと想像できる。

「麦かち」の逸話の分類は

この2段階の分類法を組み合わせれば、70「麦かち」の逸話は、「(B)奇跡に関する逸話で、(b)教祖の教え・論しがついているもの」となる。

柄杓を使う麦かちの作業は重労働である。このことに対して、教祖自らは特段何もおっしゃっていない。農作業の最中ということでもあり、実際のところ本当に何もおっしゃらなかったかもしれない。

しかし、教祖が若い衆と一緒に元気に作業をして、「八十を越えられたとは思えぬ元気で仕事をなさる」姿を見れば、その場に居合わせた者はだれもが強いインパクトを受けたはずである。ご高齢になっても、教祖が人間業を超えたお働きをされていることに、皆の者は感銘を受けたからである。

それゆえ、「麦かち」の逸話に教祖の教え・論しがついていなくても、その場に居合わせた人々は麦かちをされる教祖のお姿の中に、「力くらべ」の逸話における教え・論しに類する教訓を汲み取っていたと言えるのではないだろうか。

「ひながた」の一解釈として

人間業を超えたお働きとは、別の表現で言えば、神の働き、神でなければできない働きのことである。そして生身の人間がそのような神の働きをすることができるためには、神からエネルギーを得ていなければならない。力くらべの逸話が示唆する人間学は、まさにここにある。

神の力は教祖だからこそ持てたという理解のレベルで止まってしまうと、そこで話は終わってしまう。しかし、人間が自らの力を出せば、神もまたそれ以上の力を加勢してくれる。こう解釈すれば、人間もまた神の働きをなすことができると考えることが可能であろう。

実を言えば、私たちは、すでに神様からエネルギーをもらって日々生かされて生きている。だから、私たちが生きている以上は、神の力がそこに働いているのである。要は、この神の力を、どのように神の思いに即して活かしていくかが問われているのである。

『逸話篇』は、「ひながたの親」としての教祖のお姿を示している。それゆえ、私たちもそこから自分たちのたどるべき「ひながたの道」をそれぞれに見出していくべきである。「麦かち」の逸話に即して言えば、人間はどんなに高齢になっても、神からエネルギーをもらうことで、若い者に負けない活動を行うことができるようになり、またそのような境地を目指していくことが求められる、ということになる。

そしてそこから、天理教から発信できる高齢化社会へのメッセージの手掛かりを得ることができると思うのである。